

NHK邦楽技能者 育成会 同窓会

現代邦楽

「響

HIBIKI

」

演奏会

平成29年

3月9日(木)

午後6:00開場/午後6:30開演

渋谷区文化総合センター大和田6階

伝承ホール

〒150-0031 渋谷区桜丘町23番21号

雛の節句も過ぎ春らしくなりました。

本日はご来場いただきまして誠にありがとうございます。

NHK邦楽技能者育成会は、平成22年に55期卒業をもって終了いたしました。50余年の間に卒業生の為に作曲された多くの曲と、同時代に作曲された多くの現代邦楽作品を、ともに大切に伝えていかねばならぬと思っております。

本日の公演、現代邦楽「響」は、会員の研鑽の為にを行いました講習会が発端となり実現した演奏会でございます。伝統楽器による現代音楽のコンサートでございますが、100年後には21世紀の音楽として残ってゆくものと信じております。

今回もNHK-FM「邦楽百番」での放送が予定されております。演奏会開催にあたり、NHKはじめご協力いただきました多くの皆様に厚く御礼申し上げます。今後とも皆様にはご支援いただきますようお願い申し上げます。

ごあいさつ

現代邦楽「響」 実行委員長 後藤すみ子(2期)

本日はご来聴頂きまして誠にありがとうございます。

NHK邦楽技能者育成会同窓会は、現代邦楽「考」のタイトルで四回の演奏会を開催して参りました。同窓会発足以来の懸案(課題)でありました講習会を、ようやく本年度の企画で立ち上げ、昨年秋講習会を開催致しました。この講習会の発表の場として演奏会を開きたいと云う強い希望が起こり、今迄の「考」とは別に「響」と云う新しい演奏会の形式を企画し、開催する運びとなりました。

講習会には多くの会員が参加し、皆非常に熱心に取り組み、それぞれのパート毎に自主練習する姿を見て、湧き上がって来る力に感動いたしました。

講習会で取り上げました曲は、藤井凡大作曲「二種の三弦の為のソナタ」と小山清茂作曲「和楽器のための三重奏曲」です。「二種の三弦の為のソナタ」は長唄三味線と地歌三弦の二種で演奏するのが本来の形ですが、二種の三弦の交流は私の周りでは中々むずかしく、多くの場合地唄三弦のみで第1、第2という形で演奏して参りました。本来の形で演奏いたしますのも育成会ならではの思っております。

今から60年前頃の「現代邦楽」と云う名前も無い時代に、洋楽の作曲家が邦楽器の作品を書き始めた頃、それまでのテクニックでは考えられない技術を求められました。その技術の1つ1つを必死になって克服し、その結果、いつの間にか沢山の新しいテクニックが当然の事として演奏の中に取り入れられる様になりました。本日演奏いたします曲は全曲そのテクニックを要求されております。特に「和楽器のための三重奏曲」では、この難しいテクニックを克服し挑戦している姿を見て、改めてその技術の進歩を感じました。

この二曲に尺八のみの「覚」を取り上げ、三弦・尺八・箏 それぞれの楽器の音色・特性を聴いて頂ける様、第一部のプログラムを組みました。

第二部は、三善晃作曲の「流觴曲水譜」、牧野由多可作曲の「山陰民謡による組曲」です。「流觴曲水譜」は、板倉康明氏の指揮で演奏いたします。三善晃氏は現代音楽の作曲家のトップに数えられる方ですが、邦楽器の為の作品は少なく、この曲は非常に貴重で素晴らしい曲です。委嘱者は「邦楽4人の会」で、作曲された1986年より外国公演では必ず演奏し、パリ・ベルリン・ニューヨーク・エジンバラ等、著名な音楽祭を含め、世界47都市で演奏し好評を博しました。

「山陰民謡による組曲」は、取り上げられている曲は懐かしい曲ですが、夫々の曲に、作曲者の表そうとしている重厚さ、軽妙さ、流麗さ等感じて楽しんで頂ければ幸いです。

今、世の中はグローバル化して、情報はアッと云う間に世界中に流れる時代になっております。それぞれの国を代表する文化こそ、その国の真面を表す大切な役割を担っていると思っております。これからも精一杯努力して参りますのでよろしくお願い申し上げます。



(2016年10月・11月講習会)

最近の邦楽に感じること

日本伝統音楽振興会 代表 黒河内 茂

四十年以上も前のことであるが、当時私は邦楽のレコード制作を担当していて、様々な分野の制作を行っていた。長唄、小唄、箏曲など様々な邦楽や舞踊を習って居る方は多く、レコードなどが必要とされていたのだろう。

また当時は、「新しい邦楽作品を作ろう」と言う機運が非常に高かった。既に三味線音楽の世界では大和楽、奏風楽、三味線主奏楽などが生まれ舞踊界に新風を巻き起こしていた。しかし大きな影響を作り出したのは三曲の世界であった。いわゆる「現代邦楽」と言う言葉が定着したのも箏・尺八演奏家の活躍によるところが大きい。当時 NHKラジオで毎週放送されていた「現代の日本音楽」がこの機運に強い影響を与えたのは間違いないが、時代が全体として「これからの、未来への邦楽作品を作ろう」と言う強い意志が働いていた様な気がする。レコード会社もこの気運の中で各社競って、社会的に評価される様なアルバム作りに励んでいた。またそれに応えるべく演奏家の方々も、演奏に、そして新たな委嘱作品作りに積極的に取り組み、今日に残る名曲、名演の数々が生まれたのである。

ところで昭和六十年代にこの様な機運が生まれた背景のひとつに、NHK邦楽技能者育成会の存在があったと思っている。邦楽界はその歴史において所謂縦割りの世界であった。同じ三味線奏者でも、長唄と地歌では全く交流することは無かった。歌舞伎に結びつく邦楽では互いに顔をあわせることはあっても、共に演奏を行うことは殆ど無かったと言える。その邦楽界の演奏家を育成会では一堂に集めた。共に席を並べて学ぶことになった。三曲、長唄、浄瑠璃系の三味線、琵琶等々の演奏家が、恐らく歴史的に初めて共に学ぶ機会を得たのだ。また五線譜を基にするなどその功績を挙げればきりが無いが、これを機に共に演奏活動に入った方々も多かったことだろう。そしてこの様な背景が「現代邦楽」を支える原動力になったと思っている。

今日邦楽の危機が様々に言われているが、私が何より怖いのは日常の中から邦楽に、和楽器に接する機会が少なくなってきたことと思っている。かつては日常生活の中に何かしら三味線の音が箏の音が聞こえていたし、誰も弾かなくても家の中に箏、三味線が立てかけてあったりした。それが今日、その様なことを全く聞かなくなってきた。今年のお正月、毎年何処からでも聞こえていた「春の海」を耳にすることが極端に少なかった様な気がした。どの様な形でも良い、邦楽の音が和楽器の音が聞こえ耳にすることがあれば、再度邦楽が注目されることもあると思っている。その意味では学校での授業も大切だと思うし、何よりも多くの演奏家の方々が、自らの演奏なりをどんな形であれ発信し続けて行って欲しいと思っている。

一年程前「和楽器バンド」と言うグループが武道館を満員にしたとの話に驚いた。このグループの注目されるきっかけが、自分たちの音楽をネットへアップした事だという。

現代邦楽が盛んだった頃と状況が一変し厳しい時代であるが、しかし以前には考えられぬほど情報の発信力が高まった。以前は、制作してもその作品を多くの方々へ知らせる手段が限られていた。それが今日ではネットを通じ誰でもが自らの音楽を、演奏を、情報を多くの方へ伝え発信することが出来る。邦楽を取りまく厳しい状況の中で、多くの演奏家の方が様々にグループを作りライブ活動を行っている。心強い限りだが、これらの活動を多くの方へ発信し、ぜひ今日の社会へ大きなインパクトを与えて頂きたいと願っている。

プログラム

「二種の三絃の為のソナタ」 藤井 凡大 作曲

長 唄 嶺岸 宏枝(20期) 杵家 七可佐(25期) 今藤 政音(39期)

地 歌 富成 清女(15期) 田村 史子(33期) 富緒 清律(33期)

阿佐美 穂芽(55期) 岡戸 朋子(55期)

二本の尺八と群の為の合奏協奏曲「^{さとる}覚」 船川 利夫 作曲

尺八ソロⅠ 三橋 貴風(17期)

尺八ソロⅡ 菅原 久仁義(22期)

尺八群Ⅰ 山口 連山(32期) 原郷 界山(44期) 川村 葵山(51期) 三井 闌山(54期)

尺八群Ⅱ 山口 賢治(39期) 松本 宏平(53期) 大賀 悠司(54期) 大山 貴善(55期)

「和楽器のための三重奏曲」 小山 清茂 作曲

箏Ⅰ 井上 千恵子(15期) 谷藤 あき子(17期) 菊池 美恵子(27期) 飯田 智奈美(54期)

阿佐美 穂芽(55期) 岡戸 朋子(55期)

箏Ⅱ 小林 富美代(8期) 伊藤 厚勢(12期) 市川 喬子(13期) 杉浦 順子(22期)

梅田 佳予子(33期) 合田 真貴子(34期) 五月女 雅(35期) 五本木 茂美(39期)

十七絃 柳場 比都美(23期) 高須 真穂(32期) 大田 由美子(35期) 清野 さおり(40期)

石井 雅子(49期)

<休 憩>

曲目解説

「二種の三絃の為のソナタ」 藤井 凡大 作曲 (1962年)

1962年NHKの委嘱により作曲、初演、放送された。

二種の三絃というのは、長唄と地歌という具合に、同じ音域をもつ二種類の三絃のことである。

全体に古風な“手”をいわばひとひねりひねって使った様な曲で、したがって、古風なものとし新しい感じが奇妙に同居している、というのが一番ぴたりする様である。

古典への郷愁と皮肉…といってもよいかもしれない。

第一楽章 義太夫のようなリキミのあるからみ合い。やや速く、力強く。

第二楽章 新内のようなしっとりした粹さ、情緒を主にしたうたい合い。

第三楽章 カルミを主にした、ほんの少しおどけたところのあるおかし味をもつ間拍子。

第四楽章 長唄風の威勢のよい派手な動きを主にした、大変速くてコカシバチの難しいカケ合い。
(作曲家)

二本の尺八と群の為の合奏協奏曲「覚」 船川 利夫 作曲 (1970年)

独奏尺八2部、合奏尺八4部という1尺6寸管から2尺3寸管にいたる長短各種の尺八のみによる作品。作曲家・船川利夫は、川瀬勘輔、井上昌山両師の委嘱により、尺八2重奏曲「覚」を昭和43年10月に作曲しているが、その編成を大きくし、内容的にも第3章を増補するほか、さまざまな拡大、敷衍を行って、合奏協奏曲ともいべき形に新しくまとめあげたのがこの曲である。昭和45年10月に完成し、同年12月に東京で初演された。

尺八のみによる合奏曲は、都山流本曲などに何曲かあるが、この＜覚＞のような大規模な編成のものはかなり珍しい。尺八の演奏技法は、古典本曲や三曲合奏の尺八、それに民謡尺八など従来の古典の中で、すでにほぼ全部出つくしているともいえ、そこに新しく付け加えるべき技法は、ほとんど残されていない。その意味では、尺八の新しい可能性は、楽想、つまり音楽そのものの展開の中にのみ実現し得るのである。そこに無限の方法があるのはいうまでもないが、作曲家・船川利夫はこの曲において、垂直的な音の積み重ね方、声部間相互の対比、楽章構成などの点で、それを追い求めようとした。個々の声部の旋律には、特別目新しいものはないが、それらの積み重なりが斬新である。いいかえれば、パート譜は簡単そうに見えても、合奏することによって、全く新しい世界が現出されるのである。人間の呼吸そのものであるような古典本曲のムラ息や、透明な都山流本曲のひびきをそのまま活用する一方で、ビブラートを殺した数声部の和音は、これが尺八かと思わせるような無機的な音響を作り、2度の平行旋律は、現代という混沌の中での強固な意思というものを想起させる。

曲は「覚・さめる」「覚・しる」「覚・おぼえる」「覚・さとり」の4章から成り、窮極の境地である第4章「さとり」がそのまま一曲全体の曲名とされている。「これらの標題は決して自己を過信するのではなく、“さめたい、しりたい、おぼえたい、さとりたい”というという私の願望なのです」と、作曲者はあくまで謙虚であるが、客観的に判断して、尺八合奏についての作曲の時点での「さとり」であることは間違いなさであろう。
(SJL-98.ビクターレコードより)

「和楽器のための三重奏曲」 小山 清茂 作曲 (1968年)

1968年7月、NHKの委嘱により作曲され、同年8月NHKホールでの公開録音で初演された。

曲は、五つの楽章から成る組曲で、急→緩→急→緩→急という形式をとっている。総じて伝統的な音階、なかでも民謡音階と都節音階とを基調にして、旋律部分と伴奏部分とが、はっきり区別されるような手法になっており、作曲家特有の簡明直截な表現となっている。

(1988年 現代箏曲研究会演奏会プログラムより)

本日は、Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅴ楽章を演奏いたします。

りゅうしょうきょくすいふ
「流觴曲水譜」 三善 晃 作曲

指揮 板倉 康明(50期～55期講師)

尺八 岩本 みち子(51期) 松本 宏平(53期) 大賀 悠司(54期) 山本 貴之(55期)

箏Ⅰ 五味 静子(7期) 馬場 千年(54期) 福本 礼美(54期) 寺井 結子(55期)

箏Ⅱ 古瀬 麻美子(17期) 高須 真穂(32期) 斎藤 純子(48期) 中畝 詩歩(48期)

十七絃 清野 さおり(40期) 菊葉真 うさぎ(48期) 麗明 智翔(48期)

「山陰民謡による組曲」 牧野 由多可 作曲

尺八 曾我 哲山(25期) 松本 宏平(53期) 大賀 悠司(54期) 長瀬 建山(55期)
山本 貴之(55期)

三絃 後藤 すみ子(2期) 杵屋 静子(5期) 杵屋 勝真代(6期) 富成 清女(15期)
横山 まり子(16期) 稀音家 陽之(19期) 富緒 清律(33期) 吉岡 五月(55期)

箏Ⅰ 井上 千恵子(15期) 杉浦 順子(22期) 柳場 比都美(23期) 一色 美枝(34期)
大田 由美子(35期) 村山 佳寿子(49期)

箏Ⅱ 大澤 善子(18期) 牧野 広美(35期) 菊葉真 うさぎ(48期) 斎藤 純子(48期)
福本 礼美(54期)

邦楽界の最新動向がひと目でわかる情報誌

毎月1日発行・A4判・650円

(同内容同価格のデジタル版もあり)

お得な定期購読がオススメ(送料弊社負担)

邦楽ジャーナル

(有)邦楽ジャーナルは
【出版・通販・イベント】
3つの柱で運営します。

◆月刊情報誌「邦楽ジャーナル」の発行

◆1900アイテム余の邦楽CD・書籍等の
通信販売「HOW」の運営
<http://hj-how.com>

◆コンサートやワークショップの制作

〒169-0075 東京都新宿区高田馬場 3-38-10 代表・田中隆文
TEL03-3360-1329 FAX03-5389-7690 info@hogaku.com



「流觴曲水譜」 三善 晃 作曲 (1986年)

1986年、邦楽4人の会の委嘱により作曲され、初演された。

曲名の「觴」は、杯のこと。折れ曲がった水の流れに杯を浮かべ、それが流れついた所にいた人が杯の酒を飲むのだが、それまでに詩を作らねばならない、という晋の時代の遊び。

のどかな風景だが、そこには私たちが生きる時と、そのなかでの不図^{はからずも}の出遇いとが、たおやかに描かれている。それはまた、音楽を奏する人たちの間を流れる螺旋状^{うつ}の自然の理をも寫しとっているように思われる。

曲は、短い「序」につづいて、「流」「觴」「曲水」の三部が切れ目なしに流れる。

「序」は時の生態を想い、「流」は尺八の導入につづいて箏により静から動への流れを叙す。

「觴」はその箏と尺八の出遇い。「曲水」は主として尺八による水の変容である。

(作曲家)

「山陰民謡による組曲」 牧野 由多可 作曲 (1980年)

1980年、邦楽4人の会の委嘱により作曲、初演された。

この作品は、民謡を主題とする私の作品として第六作目に当る。このシリーズの特長は単なる民謡の邦楽器合奏への忠実なアレンジではなく、民謡を主題として私が自由な創作への素材としたものである。

今回は「しげさ節」「隠岐舟方節」「宮津節」「安来節」の四曲を素材としてまとめたもので、このうち舟方節は隠岐島に唄いつがれてきたものを最近発掘、新しく改訂して発表されたものという。

民衆の中から自然に生まれてきた音楽は、いつの世に貴重であり、私達の創作の大切な根源をなすものである。日本は、その民謡の宝庫であり、私の民謡を求めた音楽の旅もまだまだつづきそうに思われるのである。

(作曲家)



あなたの楽器は私達がささえます！

全国邦楽器商工業組合連合会

全国邦楽器商工業組合連合会とは

(全邦連)

1956年に設立した全国の邦楽器メーカー・職人・卸売・小売・楽譜
出版社等の会員からなる組織で、以下の各地組合で構成しています。

東京和楽器製造卸組合 東京和楽器商組合 北海道邦楽器商組合 仙台邦楽器商組合
福島県邦楽器商組合 神奈川県邦楽器商組合 静岡県和楽器商組合 新潟県邦楽器商組合
北陸邦楽器商工業組合 長野県邦楽器商組合 中部和楽器商組合 京都邦楽器商工業組合
全国邦楽器系組合 大阪邦楽器商組合 関西地区卸商組合 関西三絃製造組合
全国邦楽器妙音会 兵庫県邦楽器商組合 中国邦楽器商工業組合 四国邦楽器商組合
九州邦楽器商組合 [本部] 光安慶太理事長方＝三郷市鷹野 3-278-1 ☎048-955-4948

◆放送予定◆

「邦楽百番」NHK-FM

NHK邦楽技能者育成会同窓会演奏会

平成29年3月25日(土) 午前11:00～11:50

※再放送 3月26日(日) 午前5:00～5:50

平成29年4月1日(土) 午前11:00～11:50

※再放送 4月2日(日) 午前5:00～5:50

NHK邦楽技能者育成会では随時入会の募集をしております。演奏会をはじめ様々な形での活動を予定しております。未入会の卒業生のご入会をお待ちしております。

■NHK邦楽技能者育成会同窓会 事務局
TEL 080-9708-1055 FAX 03-6800-2012
E-mail:n.ikuseikai.dousoukai@gmail.com

現代邦楽「響」実行委員会

後藤 すみ子 (2期 / 委員長)

森田 柊山 (19期)

釣谷 真弓 (27期)

横山 裕子 (29期)

山口 連山 (32期)

高須 真穂 (32期)

福田 栄香 (33期)

田村 史子 (33期)

富緒 清律 (33期)

合田 真貴子 (34期)

設楽 瞬山 (38期)

清野 さおり (40期)

原郷 界山 (44期)

小林 千恵子 (46期)

松本 宏平 (53期)

福本 礼美 (54期)

井上 美和 (55期)

出演 板倉 康明 [指揮 / 50～55期講師]

NHK邦楽技能者育成会同窓会会員 [演奏]

後援 全国邦楽器商工業組合連合会

◎公益財団法人日本伝統文化振興財団

邦楽ジャーナル (五十音順)

協力 舞台スタッフ (株)琴光堂

楽譜協力 邦楽4人の会 / 野村峰山